令和４年度　日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立大久保小学校　教諭　埜口　睦

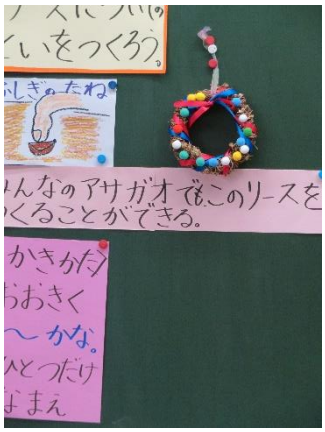
１　派遣期日　　令和４年７月１３日（水）
２　派遣先　　学校名　港区立本村小学校
　　所在地　〒106-0047 東京都港区南麻布３丁目９－３３
　　https://hommura-es.minato-tky.ed.jp/
３　研修内容
①本校の研究について　校長より
②本村幼稚園参観
③問いを創る授業　１年１組　生活科
〈授業の流れ〉
・１学期の学習を振り返る。
・２学期はどんなことをしようか、という話題から、去年の１年生が作ったアサガオのリースを見せる。（写真１）
・本時のめあて「リースについてのといをつくろう。」を提示する。（写真２）

（写真１）

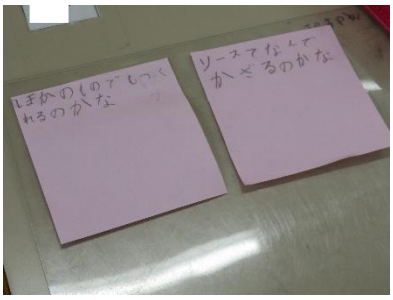
（写真２）

「えぇ！」「できるの？」と声があがるような、ギャップのあるふしぎのタネを提示することが大切。これがあることで、低学年の児童でも問い創りしやすい考えられる。

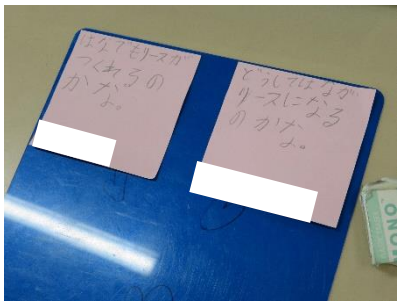
・ふしぎのタネ（問いの元になるもの）を提示する。「みんなのアサガオでもこのリースをつくることができる。」児童からは、「えぇ！」「できるの？」などと声があがる。（写真３）
・問いの書き方の約束「・おおきく　・～かな。　・ひとつだけ　・なまえ」を確認したあと、問いを書かせる。何も書いていないふせんは筆箱、問いを書いたふせんは下敷きに貼る、という約束も徹底されていた。（写真４・５）



（写真３）



（写真４）



（写真５）

・ペアでの交流。創った問いを、隣の人とで出し合う。ハンドサインを出したり、うなずいたり、リアクションをしていた。（写真６）

・全体での交流。出た問いを、「それは作り方についての問いだね。」など、教師が模造紙に分類していっていた。
・全体交流後、問いの書いてあるふせんを模造紙に貼らせる。児童は、全体交流を聞きながら自分の問いを分類していたようで、円滑にふせんを貼ることができていた。（写真７・８）

（写真６）

（写真７）

（写真８）

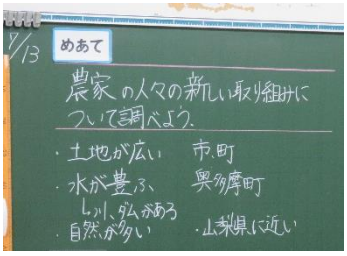
問いの分類は５年生の授業でも行われていた。低学年のうちから積み重ねていくことで、ただ問いを出すだけでなく、思考を構造化し、価値付けていくことにつながるのでは、と考えた。

・これらの問いを使って、２年生にインタビューしたり、図書室で調べたりしよう、と２学期の見通しをもった。

④問いを創る授業　５年２組　社会科

〈授業の流れ〉

・前時までの振り返り。
・本時のめあて「農家の人々の新しい取り組みについて調べよう。」を提示。
・米の収穫量ランキング上位を復習したあと、47 位が東京都であることを確認。「東京のどこで作られていると思う？」と発問すると、「土地が広いところ。」「水が豊富で川やダムがあるところ。」などの意見が出た。（写真９）
・ふしぎのタネの提示。「六本木でも米が作られている。」
・問い創り。児童からは、六本木のどこで作られているのか（場所）、どんな人が作っているのか（生産者）などの問いが出た。（写真 10）
・配付された資料を元に、問いについて自力解決をする。（写真 11）



（写真９）

（写真 10）

今回の授業では、問いを課題につなげるのではなく、それぞれが出した問いを、資料を元に解決していく流れだった。その授業のねらいに合わせて、流れは変えていると伺った。

（写真 11）

・まとめ「都会で米作りを体験することで、お米を広める取り組みをしている。」をして終了。

⑤学校案内

4　感想

港区教育委員会研究奨励校だった令和元年から３年までの研究について教えていただきとても勉強になった。児童が自ら問いを創ることで、学習問題を自分事として捉え、解決する授業ができ、児童の主体的な学びにつながる、という話には強く共感した。児童「なぜ？」「どうして？」と思えるふしぎのタネを教師が準備することに力を入れることが大切なので、今まで用いたふしぎのタネはデータとして保存してあると伺い、それができれば問いづくりの授業への教員側のハードルが下がるのではないかと参考になった。

最後になりましたが、このような機会を与えていただき、ありがとうございました。